山部赤人の神亀三年印南野行幸従駕歌

鈴木　崇大

はじめに

『万葉集』巻六冒頭から四十首余りの歌々は、笠金村・車持千年・山部赤人による養老末年～神亀年間の行幸従駕歌である。集中、行幸従駕歌は百首を超え、既に舒明朝より詠まれていたと覚しい、遅くとも斉明朝にはその確かな例が見出せるが、巻六冒頭部のそれは、主として長反歌から成り、行幸先の土地の讃美を以て行幸とその主催者たる天皇との讃美に換えるという形式を持つ持統朝の柿本人麻呂の吉野讃歌（1・三六～三九）を受け継いだものと見て大過あるまい。

だが、巻六前半の行幸従駕歌中には、一見すると私情を詠んだと見られる歌も含まれている。特に山部赤人の神亀三年印南野行幸従駕歌（6・九三八～九四〇）は、長歌・第一反歌で土地褒めを行う一方、第二・第三反歌にて家郷を偲ぶという、歌群内に於いて断絶とも捉えられかねない構成を示している。これをそのまま断絶として処理して良いのか、否か。本稿はその問題より発し、この当時の行幸従駕歌のあり方に就いて考察を行う。

一

山部宿祢赤人の作れる歌一首［并せて短歌］

やすみしし　我ご大君の　神ながら　高知らせる　印南野の　大海の原の　荒栲の　藤井の浦に　鮪釣ると海人舟騒き　塩焼くと　人そ多にある　浦をよみ　うべも釣りはす　浜をよみ　うべも塩焼く　あり通ひ

見さくもしるし　清き白浜　（6・九三八）

反歌三首

沖つ波辺波を安み漁りすと藤江の浦に舟そ騒ける　（6・九三九）

印南野の浅茅押し靡べさ寝る夜の日長くしあれば家し偲はゆ　（6・九四〇）

明石潟潮干の道を明日よりは下笑ましけむ家近づけば　（6・九四一）

当該歌群の前には同じ折に詠作したと見られる笠金村の歌群が位置する。参考の為にそれも掲げておく。

三年丙寅の秋九月十五日、播磨国印南野に幸し時に、笠朝臣金村の作れる歌一首[并せて短歌]

名寸隅の　船瀬ゆ見ゆる　淡路島　松帆の浦に　朝凪に　玉藻刈りつつ　夕凪に　藻塩焼きつつ　海人娘子ありとは聞けど　見に行かむ　よしのなければ　大夫の　心はなしに　手弱女の　思ひたわみて　たもとほり　我はそ恋ふる　船楫をなみ　（6・九三五）

反歌二首

玉藻刈る海人娘子ども見に行かむ船楫もがも波高くとも　（6・九三六）

行き廻り見とも飽かめや名寸隅の船瀬の浜にしきる白波　（6・九三七）

金村歌の題詞に拠ると神亀三年（七二六年）九月に行幸があったことになるが、『続日本紀』神亀三年条には以下のように記載されている。[1]

（九月）庚寅（十五日）、内裏に玉棗生ひたり。勅して、朝野の道俗らをして玉棗の詩賦を作らしめたまふ。壬寅、文人一百十二人玉棗の詩賦を上る。その等第に随ひて、禄賜ふこと差有り。……。正四位上六人部王・藤原朝臣麻呂、正五位下巨勢朝臣真人、従五位下県犬養宿祢石次、大神朝臣道守ら廿七人を装束司とす。従四位下門部王、正五位下多治比真人広足、従五位下村国連志我麻呂ら一十八人を造頓宮司とす。播磨国印南野に幸せむとしたまふ為なり。

冬十月辛亥、播磨国印南野に行幸したまふ。甲寅、印南野邑美頓宮に至りたまふ。辛酉、駕に従へる人と、播磨の国郡司・百姓らの行在所に供奉せる者とに、位を授け禄を賜ふこと人ごとに差有り。また行宮の側近の明石・賀古二郡の百姓、高年七十已上に穀賜ふこと各一斛。播磨の堺の内の大辟已下の罪を曲赦す。癸亥、行、還りて難波宮に至りたまふ。庚午、

式部卿従三位藤原宇合を知造難波宮事とす。陪従せる无位の諸王、六位已上、才藝の長上、并せて雑色の人、難波宮の官人、郡司已上に禄賜ふこと各差有り。癸酉、車駕、難波宮より至りたまふ。

一読して明らかなように、金村歌の題詞と『続日本紀』の記事とは行幸の日が一致していない。

この行幸の目的は何であったのか。梶川信行氏は『住吉神社神代記』を踏まえ、難波宮再建に先立ち、この周辺に鎮座していた住吉大神の子神の「魚次神」を祀る為のものであったかと推測している[2]。また村山出氏は梶川説を支持し、更に九月十五日に内裏に玉棗が生じて「玉棗詩賦献上の勅命を下すにあたり内定の印南野行幸に触れられることがあっても不思議ではない」と述べ、祥瑞としての棗の意味、奏上された藤原宇合の「棗賦」の内容、そして行幸の理念との密接な関係を指摘し、この「金村歌の題詞の日付をこの流れの中で」捉えるべきことを主張する[3]。両氏の説共に蓋然性が高いと考える。

それでは実際に歌の表現を見ていこう。

長歌冒頭の歌い起こし「やすみしし　我ご大君」は、天皇讃美を前面に押し出した赤人の行幸従駕歌の定型的な表現である。彼は長歌形式の行幸従駕歌を五首残しているが、内四首はいずれも冒頭に「やすみしし　我ご大君」の句を据えている。

その「大君」が「神ながら高知らせる」土地として「印南野」はあり、そこに「大海の原」があり、「藤井の浦」があると赤人は詠む。土地を大きく提示した後に徐々に地点を絞ってゆく。それは焦点化の手法ではあろうが、その直前の「高知らせる」の句との連関にも注目したい。即ち、天皇の支配する国土の広さを表現しようとする意図が此処には伏在していよう。天皇が「高知らす」土地は、その稜威の喩でもあらねばならない。かかる表現はその行幸自体を讃美する意図に基づいていたに違いない。また、当該歌を筆録したのが赤人本人であったなら、「印南野」の原文「稲見野」には豊穣な土地のイメージが、「大海之原」には広大な海のイメージもが含み込まれている（正確を期して言えば、「広大な海を臨む原」という程の意味になろうか）と理解すべきであろう。天皇が「神ながら」支配しているからこそ国土は陸も海も豊穣にして広大なのである。[4]

「藤井の浦」は第一反歌にも登場する「藤江の浦」と同じであるとされている。何故に長歌と第一反歌とで同一地の地名が異なっているのか。諸本に異同は無い。人麻呂が「藤原の御井」を「藤井」と呼んだ例（1・五二）はあるものの、

それは約語であって当該歌の場合とは異なる。差し当たって、この場所には二種の呼称があり、「藤井の浦」「藤江の浦」はそれぞれ長歌・反歌で分担したものと考えておく。

歌の舞台を設定した後に、赤人は「鮪釣ると　海人舟騒き　塩焼くと　人そ多にある」と景を描く。「鮪」はマグロのこととされており、集中他の用例は次の一首のみ。

鮪突くと海人の灯せる漁り火のほにか出でなむ我が下思ひを　（19・四二一八）

東光治氏は、瀬戸内海にマグロは回遊して来ないことを根拠に当該歌の「鮪」はサワラであるとした。[5]『私注』『旧大系』『全注』『和歌大系』『全歌講義』等もその可能性を指摘しているが、この時代の食生活に就いて総合的な考察を行った関根真隆氏は「サバ・カツオなどの名は、明らかに文献にみるからシビに含まなくてもよかろう」[6]と述べている。更に注目したいのが新谷秀夫氏の説である。

（※引用者注――当該歌に於ける「鮪釣る」という表現が）儀礼歌の中で使われた表現であることを鑑みると、実際に「鮪」を「釣る」ということが赤人の眼前に存した光景である必要はないと言っても過言ではない。瀬戸内海に回遊しないとか、「釣る」にはあまりに大きすぎるということなどまったく問題となるはずもなく、……つまりここで「鮪釣る」なる表現もまた、……「印南野の大海の原の　荒栲の藤井の浦」が、「鮪」ほどの大魚を「釣る」ことができるほどの豊かな土地であると讃美する意図をもって撰ばれた表現であると見て大過あるまい。[7]

新谷説は、行幸従駕歌に於ける表現の論理を的確に捉えていると考える。

そのように鮪を釣る為に多くの漁船が海上にある様を赤人は「騒き」と表現している。これもまた赤人がよく用いる言葉であった。

……　朝雲に　鶴は乱れ　夕霧に　かはづは騒く　見るごとに　哭のみし泣かゆ　古思へば　（3・三二四）

……　沖つ島　清き渚に　風吹けば　白波騒き　潮干れば　玉藻刈りつつ　……　（6・九一七）

み吉野の象山の際の木末にはここだも騒く鳥の声かも　（6・九二四）

あしひきの山にも野にもみ猟人さつ矢手挟み騒きてあり見ゆ　（6・九二七）

九一七・九二四・九二七は行幸従駕歌であり、三二四は飛鳥の旧都を望んで詠んだ歌である。これらを見ると、赤人は、景に於ける活気・賑わしさ・生動性の表現として「騒

き」という言葉を用いたと言える。「騒き」はそれ自体が讃歌性を担う言葉であった。そうしてここでの「海人舟」の活気は取りも直さず海人達が天皇に奉仕しているが故なのである。この景の描写部分は対句であり、次の「多にある」もまた「騒き」と同じ表現性を持っていると言えよう。

「塩焼く」に就いてだが、「塩」を「焼く」という言葉を持つ歌は当該歌を含め集中十四例。その多くが、

……網の浦の　海人娘子らが　焼く塩の　思ひそ焼くる　我が下心　（1・五）

等のように寄物陳思歌的に用いられている（十四例中九例）が、ここでは「鮪釣る」と対句を形成していることに鑑みると、その製塩もまた天皇に対する海人の奉仕という意味を持っていると見るべきであろう。

次の「浦をよみ　うべも釣りはす　浜をよみ　うべも塩焼く」は、海人の奉仕が活気に満ちていることの根拠として、「浦」と「浜」とが素晴らしいから（「よみ」）であると述べられる。以上の対句部分に就いては神野志幸恵氏の分析がある。

藤井の浦に――浦――――浦
―――――――――――――
浜――――浜――清き白浜

九三八歌は、いわば入口と出口とがずれるように構成されているのである。それは均衡した構成というのとは異なるものをめざしているというべきであろう。

……入口と出口とでずれを作るような、赤人の意識的な対句構成の試みとしてとらえるべきだと考える。(8)

的確な指摘であるが、これを更に稿者なりに追究しておきたい。表現上は「浦」と「浜」と対句になっているが、「藤井の浦」は地名であり、そこに「浜」「清き白浜」も含まれていると言える。漁撈と製塩の対句部分は「藤井の浦」を海上部分（浦）と陸地部分（浜）とに分けての、その土地の豊饒の表現であった。また、末句の「清き白浜」は佳景としての「藤井の浦」の表現なのであろう。集中には「浦」を褒めるのに「浜」を言う例も見出される。

八千矛の　神の御代より　百船の　泊つる泊まりと
八島国　百船人の　定めてし　敏馬の浦は　朝風に
浦波騒き　夕波に　玉藻は来寄る　白砂　清き浜辺
は　行き帰り　見れども飽かず　うべしこそ　見る人
ごとに　語り継ぎ　偲ひけらしき　百代経て　偲はえ
行かむ　清き白浜　（6・一〇六五）

まそ鏡敏馬の浦は百船の過ぎて行くべき浜にあらなくに　（6・一〇六六）

大船にかし振り立てて浜清き麻里布の浦に宿りかせまし　（15・三六三二）

福麻呂の長反歌一〇六五・一〇六六は赤人の当該歌の影響が感じられるが、「浜」の讃美を以て「敏馬の浦」を褒めている。三六三二もまた「浜」が「清い」からこそ、それが属する「麻里布の浦」も当然ながら「清い」ことになる。当該歌に戻って言えば、「清き白浜」と述べる時、それは「藤井の浦」の讃美に繋がっているのである。そうして前半部では「印南野」→「大海の原」→「藤井の浦」と焦点化がなされていると上に述べたが、ここでは「藤井の浦」→「清き白浜」と、更に焦点化がなされているのである。

この豊穣と佳景とを繋ぐのが「浦をよみ／浜をよみ」の「よし」という讃辞なのである。それは活気ある海人の奉仕という景の根拠のみに留まらず、それに続く部分「あり通ひ　見さく」の根拠、「天皇が通い続けて御覧になる」ことの根拠でもある。即ち、「よし（素晴らしい）」が分節されて豊穣の表現とも佳景の表現ともなるのである。漁撈・製塩が活気に満ちて行われるのが「うべ」であり、更に「あり通ひ見さく」が「しる」き程の「清き白浜」であるのも、「藤井の浦」が「浦をよみ／浜をよみ」と言える土地であるからに他ならない。「浦をよみ／浜をよみ」の「よし」を豊穣に於いて納得するのが「うべ」であり、佳景に於いて納得するのが「しるし」であると言えようか。それはまた、天皇の支配する天下の中で、ここ「印南野」が行幸の土地に選ばれたことを納得し、強調する表現でもある。

猶「あり通ひ」とはしているものの、聖武天皇がこれ以前に印南野を訪れた記録はない。しかしながら、これは当代のみならず、即ち一人聖武のみならず皇統の連続性を念頭に置いた表現であったと考えられる。代々の天皇が「あり通ひ見さく」程に「藤井の浦」は素晴らしいという、讃歌の論理に要請された表現なのであろう。

二

第一反歌は、長歌の要約であると先ずは言える。冒頭では「藤江の浦」の浦波が、沖も辺も穏やかであることを詠む。但し、讃歌に於いては、波が立っていること（川や滝が激しく流れていることも含む）の表現は、土地褒めの意味を持っていた。

年の端にかくも見てしかみ吉野の清き河内の激つ白波　（6・九〇八）

……　沖つ島　清き渚に　風吹けば　白波騒き
潮干れば　玉藻刈りつつ　……　（6・九一七）

行き廻り見とも飽かめや名寸隅の船瀬の浜にしきる白波　（6・九三七）

右に挙げたのはいずれも行幸従駕歌だが、当該歌では海面が凪いでいることが詠まれている。それは海人の奉仕を叙述することが重視されているからであろう。生動的な自然は、常にではないものの、往々にして人間の活動と対立する。だが、前節で述べたこととも関係するが、景の生動性の表現はその景の讃美の表現でもある。ここでは、讃美すべき景を海人の奉仕の様に設定したが故に、自然（当該歌では浦波）の状態はそれを可能にしたという点に於いて間接的な讃美の対象となるのである。

飼飯の海の庭よくあらし刈薦の乱れて出づ見ゆ海人の釣舟　（3・二五六）

風をいたみ沖つ白波高からし海人の釣舟浜に帰りぬ　（3・二九四）

参考に二首挙げた。前者は人麻呂の羇旅歌八首の内の一。「飼飯の海」が凪いで海面が穏やかであるということが、「海人の釣舟」が入り乱れて出漁している様から推測している。後者は同じく巻三から、角麻呂の歌四首の内の一。これは人麻呂の二五六番歌と丁度反対で、（歌群の内容からして恐らく難波の海の）波が高くなってきたらしいことが、「海人の釣舟」が浜に戻ってきたことから推測されている。二首とも行幸従駕歌ではないが、いずれも海面の状態によって漁撈が左右されると述べていることが了解されよう。特に人麻呂の歌は、海が凪いでいることと海人の出漁とが直接的に関係づけられていることが当該歌の構成と等しい。当該歌は「騒き」で表現される景の内実を、自然ではなく、人間の活動にスライドさせることで讃美表現が可能になったと言えよう。これは人間の活動に対立しない限りに於いて自然の生動性は讃美されるということ、逆から言えば自然の生動性よりも人間の活動が優先されるということである。

当該反歌は長歌の要約であると述べた。再度「藤江の浦」と地名を述べ立て、その土地の生動性を歌い上げる。しかし、これ以降、第二・第三反歌では土地の讃美は為されない。土地の讃美、より正しく言えばそれを通じての王権讃美どころか、主題は家郷思慕へと大きく転換する。

第二反歌は、舞台が印南野に、恐らくはその行宮近辺に移る。「浅茅押し靡べさ寝」とは、行宮の周辺に官人達が野宿している様を表現したものであろう。「押し靡べ」という語は集中六首七例見出されるが、中でも人麻呂の阿騎野遊猟歌、

……　隠りくの　泊瀬の山は　真木立つ　荒山道を
岩が根　禁樹押し靡べ　坂鳥の　朝越えまして　玉かぎる　夕さり来れば　み雪降る　安騎の大野に　旗すすき　篠を押し靡べ　草枕　旅宿りせす　古思ひて
（1・四五）

が参考になろう。人麻呂歌では「押し靡べ」の語を二度用いているが、特に後半の例が当該歌と等しい意味を持っている。軽皇子（後の文武天皇）に供奉して詠作された作、即ち行幸従駕歌に準じた作であるが、赤人はこの人麻呂歌から「押し靡べ」を学んだに違いない。猶、生えている草を倒してそこを寝床とするという例は、

神風の伊勢の浜荻折り伏せて旅寝やすらむ荒き浜辺に
（4・五〇〇）

にも見られるが、この「折り伏せ」よりも「押し靡べ」には多くの官人が打ち揃って宿るというニュアンスが込められていると見られる。

「さ寝」とは、集中の例（全三十三例）に徴すると、殆どが共寝か、若しくは共寝を意識した状態を指している。一見すると例外と覚しいのは次の歌である。

鶴が鳴き葦辺をさして飛び渡るあなたづたづし独りさ寝れば
（15・三六二六）

遣新羅使人歌群中の中の一首。これは「古き挽歌」の題詞を持つ長歌三六三五の反歌である。その長歌を確認しておく。

夕されば　葦辺に騒き　明け来れば　沖になづさふ
鴨すらも　妻と副ひて　我が尾には　霜な降りそと
白栲の　羽さし交へて　打ち払ひ　さ寝とふものを
行く水の　帰らぬごとく　吹く風の　見えぬがごとく
跡もなき　世の人にして　別れにし　妹が着せてし
なれ衣　袖片敷きて　独りかも寝む
（15・三六二五）

「鴨すらも妻と副ひて……さ寝」するが、妻を喪った自分は「独りかも寝む」と詠む。独り寝でありながら反歌で「さ寝」と言うのは矛盾であるようにも思えるが、或いは「妹が着せてし　なれ衣」を「袖片敷きて」寝るが故に、それは現実的には「独り寝」ではあるものの、妹と観念的な一体感が齎され、それを「さ寝」と詠んだものと覚しい。その推測の参考となる歌がある。

我が衣形見に奉る敷栲の枕を放けず巻きてさ寝ませ
（4・六三六）

逢はずとも我は恨みじこの枕我と思ひて巻きてさ寝ませ
（11・二六二九）

前者は巻四の湯原王と娘子との贈答歌群中の一首。「形

見」として贈呈した「枕」を用いることで、それが「さ寝」になるという。後者は巻十一の寄物陳思歌の中の一首で、六三六と同じ発想で詠まれていることが知られる。実際には共寝ではないが、観念的な一体感をこれらの例に看取することが出来よう（附言しておけば、三六二六に於いて「さ寝」と詠みながら「あなたづたづし」と詠むのは、「妹」が亡くなっていることと関係があるのではないか。何故と言うに、妹とは既に幽明界を異にしている為に一体感が完成しないのであるから）。

これ以外の例も見ておこう。

思はずもまことあり得むやさ寝る夜の夢にも妹が見えざらなくに　（15・三七三五）

さ寝る夜は多くあれどもの思はず安く寝る夜はさねなきものを　（15・三七六〇）

いずれも巻十五後半の中臣宅守・狭野弟上（茅上）娘子の贈答歌群から、宅守の歌。両歌に於ける「さ寝」は共寝ではあり得ないが（但し前者は「夢」に「妹」が現れてはいる）、「さ寝」が相手を強く希求する眠りという意味を持っていることは動かない。

当該歌の例に戻るが、これは共寝であるとは見えない。岩崎良子氏は、この「さ寝」に就いて、「共寝を希求する気持を含み、望郷の念を表現した旅の仮寝の寂寥故のことばであり」、「初めて愛する人に思いを寄せて一人寝る夜を表すことばとなった」と述べ、「「さ寝る」とは言ったものの、現実は浅茅押しなべ寝ていると、赤人は滑稽を感じさせるつもりでうたったのかもしれない[9]」と説いた。滑稽を感じさせるかどうかはともかく、また六三六番歌のように妹の形見の品を持っていることも定かではないが、宅守の歌と同じく、「愛する人に思いを寄せて一人寝る」ことを「さ寝」と言ったと捉えておきたい。

そうして、そのような夜が長く続いているので家が偲ばれてならないと歌い収める。これは、上にも述べたが、長歌・第一反歌の主題と大きく異なっている。続く第三反歌でも、この第二反歌の主題が引き継がれる。

第三反歌は更に舞台が変わる。「明石潟」は他に見ないが、諸注、明石川河口付近の干潟のことかとしている。その明石は、『日本書紀』大化二年正月の詔、

凡そ畿内は、東は名墾の横河より以来、南は紀伊の兄山より以来、西は赤石の櫛淵より以来、北は近江の狭狭波の合坂山より以来を、畿内国とす。

や、人麻呂の羇旅歌、

灯火の明石大門に入る日にか漕ぎ別れなむ家のあたり見ず　（3・二五四）

に見られるように畿内と畿外との境界であった。

「潮干の道」は、一見すると「明石潟」の潮が引いて歩けるようになった道のことかと思われる。しかし干潟とは満潮時は海中に没している砂泥底であり、敢えてそのような場所を歩いて通るものかという疑問が生じる。諸注の中には、「潮干の道を」の「を」を、「歩きにくい道ではあるけれども、という逆接の意を含む」（『新大系』）等のように捉える解釈も散見する。

「明石」を詠んだ歌は当該歌を含め集中九例。以下にそれらを掲げる。

灯火の明石大門に入る日にか漕ぎ別れなむ家のあたり見ず　（3・二五四）

天離る鄙の長道ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ　（3・二五五）

見渡せば明石の浦に灯す火の穂にぞ出でぬる妹に恋ふらく　（3・三二六）

……　居待月　明石の門ゆは　夕されば　潮を満たし　（3・三八八）

……　明けされば　潮を干しむ……

粟島に漕ぎ渡らむと思へども明石の門波いまだ騒けり　（7・一二〇七）

我が船は明石の水門に漕ぎ泊てむ沖へな離りさ夜更けにけり　（7・一二二九）

天離る鄙の長道を恋ひ来れば明石の門より家のあたり見ゆ　（15・三六〇八）

……　我が心　明石の浦に　船泊めて　浮き寝をしつつ　わたつみの　沖辺を見れば　……　（15・三六二七）

以上明らかなように、どれも海上若しくは海辺を指していることが分かる。「明石」は畿内と畿外との境界であったが、ここから推測されるのは、当時の人々にとってその境界は明石海峡（明石の水門）に於いて実感されたらしいということである。『日本書紀』の記事「明石の櫛淵」は山陰道の途次と考えられるが、[10]それは当然ながら陸路であって海辺からは相当に隔たっている。他方明石海峡からは、人麻呂の歌にもあるように「大和島」、つまり生駒・葛城の山地を眺めることが出来たのだが、その景は、西下する者には故郷との離別を、東上する者には故郷への帰還を感じさせるものであったのであろう。即ち、万葉びとにとって「明石」とは播磨国の一つの郡ではなく、何を措いても畿内と畿外との境界であり、それは本州と淡路島との間の海峡のイメージとして存したものと思われる。赤人が当該歌を詠んだのは「明日よりは」とあることから印南野出発の前日と覚しいが、[11]「家」のある故郷に「近づけば」、それ

が実感されるのは――現実的に言えば印南野を出発した時点で既に「家」に近づくことにはなるのだが――明石海峡に於いてであった。この箇所に就いて清原和義氏は、語句の用例を分析、考察の結果、明石海峡を船にて航行することを詠んだものと解釈した[12]が、稿者もその説に賛同したい。

「下笑む」も集中他例を見ない。しかし、記歌謡の例だが、

あしひきの　山田を作り　山高み　下樋をわしせ　下訪ひに　我が訪ふ妹を　下泣きに　我が泣く妻を　今夜こそは　安く肌触れ　（『允恭記』七八）

と「下訪ひ」「下泣き」等の言葉があることから、「下笑み」とは「人に知られないように「笑む」」という意味なのであろう。

しかし何故「下笑まひ」なのか、普通に「笑まひ」ではないのか。行幸とは形式上天皇が主催する特別な行事に他ならず、供奉する官人にとっては単なる仕事以上の意味があった。寧ろそれに供奉することが栄誉であると感じねばならないような空気が存したように思われる（実際、当該行幸に於いても従駕した官人は賜禄されてもいる）。帰途に就くからとて大っぴらに「笑む」訳にはいかず、故に人に知られないように「笑む」＝「下笑み」をするのである。ならばこの第三反歌は、公の意識のその建前性を暴露してしまうような歌、本音を直截に見せた歌であると先ずは言えそうである。

三

以上、当該歌群を見てきたが、以下では長歌と反歌との関係に就いて考察したい。

第一反歌の、長歌との関係はその要約と見られる。しかし、第二・第三反歌と長歌との関係は極めて薄いと言わざるを得ない。長歌中の語句は第二反歌に「印南野」という地名以外には存しない。その主題も、長歌では土地褒めに終始しているのに対し、第二・第三反歌では家郷への思慕に変わっている。また、第一反歌中にも第二・第三反歌に展開するような要素は見出し難い。即ち、第二・第三反歌は、長歌の主題を受け継ぎ、内容を要約する所の一般的な反歌のあり方から大きく隔たっているのである。

当該歌群の構成に就いて論じた先行研究を確認しておきたい。梶川氏は、当該第二・第三反歌を、「この行幸中の別の機会に作られた家郷思慕の歌ではなかろうか[13]」と指摘、また第一反歌と第二反歌との間に脱落を想定してもいる[14]。笠井昇氏は、当該歌群の前に位置する金村歌との連作を意識したものとの見解を示した[15]。神野志幸恵氏もまた金村と

赤人との連繋を見、海人娘子へ恋情を詠みながら讃美で歌い収める金村歌と、讃美を詠み出しながら家郷への思慕で歌い収める赤人歌とは反転した構成になっているとし、神野志隆光氏の説を引きつつ「歌うことを通して発見された「私情」が、「歌われねばならぬ「私的」な心情として制度化」されてゆく」と述べた。[16] 坂本信幸氏は、九四七番歌の左注に就いて詳細な分析と検討と行い、当該歌群を、続く「辛荷島歌群」（6・九四二～九四五）、「敏馬浦歌群」（6・九四六～九四七）と同時の作とし、これら三歌群に構成を認め、「赤人作の文芸性が明らかになる」と説いた。[17] 神野志隆光氏は、当該歌群の構成を、『万葉集』という書物の性格から解き明かそうとし、「金村歌――赤人歌――金村歌と円環するともいえ、両者はかかわりあって一体だと認められます」と述べ、私的な感情をも掬い取って世界を構築するものとして、『万葉集』の「歴史」世界は成り立っていると述べる。[18]

この問題を考察する前段として、行幸に於いて家郷を思慕する歌が詠まれることは異例ではないということを確認しておきたい。

山越しの風を時じみ寝る夜落ちず家なる妹を懸けて偲ひつつ　（1・六）

我妹子をいざ見の山を高みかも大和の見えぬ国遠みかも　（1・四四）

葦辺行く鴨の羽がひに霜降りて寒き夕は大和し思ほゆ　（1・六四）

大伴の高師の浜の松が根を枕き寝れど家し偲はゆ　（1・六六）

大伴の御津の浜にある忘れ貝家にある妹を忘れて思へや　（1・六八）

河口の野辺に廬りて夜の経れば妹が手本し思ほゆるかも　（6・一〇二九）

大君の行幸のまにま我妹子が手枕巻かず月そ経にける　（6・一〇三二）

六は軍王歌。表現の新しさからその作歌年代を疑問視する向きもあるが、今は、配列・題詞の通り舒明年間の讃岐国行幸の折の歌と捉えておく。四四は左注によると持統六年の吉野行幸の折の石上麻呂の詠。六四は慶雲三年、文武天皇の難波宮行幸時の志貴皇子の作。六六・六八は、持統上皇の同じく難波宮行幸の際の置始東人・身人部王の歌。一〇二九・一〇三二は共に、天平十二年、伊勢国行幸の際の大伴家持の歌である。これ以外にも数例見出されるが、舒明朝から持統・文武朝、聖武朝にかけて行幸に於いて家郷を思慕する歌が詠まれていたことが確認出来たかと思

う。

さて、長反歌構成で土地褒めを以て王権讃美を行う儀礼的な行幸従駕歌は人麻呂の吉野讃歌をその嚆矢とするが、かかる形式の歌は元正朝末期～聖武朝初期には金村・千年・赤人に受け継がれる。行幸に於いて長歌を詠作披露することがこの三人の役割であったろう（長歌を詠み得る力量を備えた者であるが故に彼等は召されたと考えられる）。本稿冒頭にも述べたが、金村や赤人が詠作した吉野讃歌（6・九〇七～九一二、九二〇～九二七）は主題と表現とに於いて人麻呂のそれを引き継いだ作となっている。

だが、この時期は人麻呂的讃歌のみが詠まれていた訳ではない。金村は海人娘子を思慕する歌（6・九三五～九三六）を詠みもし、千年は恋情を込めた歌（6・九一三～九一六）を詠みもしている。これは何故か。そのような歌が詠まれる理由として従来様々な説が提出されてきたが、行幸に於いては王権讃歌だけではなく私情を主題とした歌をも詠作することが本来的に求められていたのではないか。そもそも長反歌を以て王権讃美を行う人麻呂タイプは行幸従駕歌としては寧ろ異例であり、上に確認したように、行幸従駕歌は家郷思慕を中心とする私情を詠むという様式が既に存していた。そこに人麻呂タイプが新たに加わる。その合成されたタイプが聖武朝初期の行幸従駕歌であった。換言すればその二つの流れの合流地点に金村・千年・赤人の行幸従駕歌は位置づけられる。

但し、この私情を披瀝するということ、それを直ちに詠作者の心情・実感の恋な吐露と見てはなるまい。神野志幸恵氏の見解を展開しつつ述べれば、それは寧ろ行幸従駕に於ける詠作の制度としてあったということであろう。即ち、私情を披瀝することも行幸従駕歌詠作に於けるテーマであった、土地褒めだけでなく、かかるテーマの歌をも詠むことが求められていたと考えられる。それ故にこそ私情を主題とした歌は作者がその心情を自由に詠んだものではあり得ない。この〈私〉情は行幸従駕歌という〈公〉の内に在る。〈私〉と〈公〉とは対立しているのではなく、〈公〉が〈私〉を包括している。行幸従駕歌という〈公〉的な形式の内部に在る限りに於いての〈私〉性＝私情披瀝なのであって、その〈私〉性すらも〈公〉を構成している、更に言えば、〈公〉に於いて欠くべからざる要素となっている、即ち王権を支えているのである。そうして彼等の歌は、前代から継承されてきている所の様式としてではなく、即ち単に様式に乗っただけではなく、王権の要素である所の「みやび」を演出する意図の下に詠まれたと考えたいのである。池田三枝

子氏は、当該行幸での金村歌が海人娘子への思慕を詠んでいることを次のように説明している。

天皇の徳が洽く行き渡った「みやび」な土地にいる以上は、土地と娘子であっても、「みやび」な女性でなければならない。都と同様に「みやび」な女性がいて、都風の恋愛をすることで、その土地を均質化することが出来る。鄙と都を均質化して、都の秩序下に包摂するという意味に於いて、土地の娘子との恋愛は「徳沢流洽」の具現たり得、行幸従駕歌として機能したと考えられる。[19]

これに続いて池田氏は「「徳沢流洽」の理念の下に詠出された聖武朝の行幸従駕歌には、その理念の影響として、鄙を都と均質化するという形の「みやび」の発現があった」と述べている。興味深い説だが、この「みやび」を金村歌のみならずより拡大させることは出来ないか。

既に多くの研究にて指摘されていることであるが、「みやこ」とは「宮」+「処」、天皇のおわす場所を示し、それは宮城のみに留まらない。天皇が行幸すればその場所が「みやこ」となる。他方、都風・宮廷風を指す「みやび」という概念は壮麗な大都市平城京出現と共に顕在化するとされる。ならば京外の地に於いては、天皇行幸の際、原理的には「みやこ」ではありつつ感覚的には「みやこ」ではないという乖離が発生する。行幸に於いて家郷を思慕する歌を詠作披露することが伝統的な制度としてあったと覚しいが、この時代には行幸先の「みやこ」らしからぬ「みやこ」に於いてそれが「みやび」なわざとして意識化されるようになったのではないか。加えて言えば、これには長反歌の詠作が並々ならぬ技量を要するということも関係していよう。

当該歌は長歌・第一反歌と第二・第三反歌との間で激しく捩れている。しかし捩れながらも連続している。即ち、王権讃美から家郷思慕へのこの転換・展開は、〈公〉に奉仕する中で〈私〉が析出してくる瞬間を表現するものとなっているのである（言う迄も無く、その〈私〉情の表出は「みやび」の表現に他ならない）。その転換の際やかさは同じ折の金村歌には見られない。

第二反歌「印南野に浅茅押し靡べさ寝る夜の日長く」は、突如として視点を第一反歌で詠まれていた海辺の遠景から官人達の群れる近景に引き戻しているが、それは同時に、雄大な景に表象される王権讃美の念＝〈公〉の意識から自己の置かれた現状の認識を通じての〈私〉情への転換という意味をも担っている。第三反歌で「明石潟」と歌い出す

時、聞き手の視点は近景から遠景を超えて彼方へ、想像の景へと誘われることになる。明石は畿内と畿外の境界であり、且つ「明石潟」を目睹出来ないが故にこそ却ってこの言葉が導く想像の内には喜び・期待が滲むことになる。そこには、第二反歌の舞台の近景（「印南野」）から想像の景（「明石潟」）に至る視点の振幅の度合が比例していよう。赤人は、第一・第二・第三反歌披露の中で聞き手の視点を遠景→近景→想像の景と大きく動かしているが、それは意識を王権讃美→家郷思慕→その解消の喜び・期待へと動かす為の手段ではなかったか。しかも「明石潟潮干の道」は船で通過するのであれば、「明石潟」と飛んだ意識は更に海上を「家」へ向かって東に滑っている。

そうして「下笑ましけむ」という言葉が登場する。この言葉に就いて上に「本音を暴露したような」と述べたが、寧ろかかる言葉、本来であれば秘されるべき言葉によって〈私〉情が十全に表現され、延いては「みやび」が実現されることになるのである。家郷思慕の歌に於いて伝統的・類型的に用いられてきた言葉に拠らず、極めて稀な言葉、「下笑む」という言葉を選び取ったことで、赤人は一般化され得ない〈私〉情の表出に成功した。ならば、聊か類型的な第二反歌はこの言葉に達する為の助走でもあり、第三反歌の跳躍には、彼の（〈私〉性ではなく）〈個〉性を認めても良いと思われる。

ここには赤人の巧妙な構成意識と技術とが見出される。それは最早単なる王権讃美と家郷思慕とを行う所の従来の行幸従駕歌とも、人麻呂的行幸従駕歌とも異なった地点にある。この二つの合流地点に金村・千年・赤人の行幸従駕歌は位置づけられると述べた所以であるが、赤人は、〈私〉情の表出が「みやび」に至り、それが結果的に王権を支えるという逆説的な機構を最も認識していたと言えるのではないか。

【注】

※『万葉集』の本文は多田一臣『万葉集全解』に拠ったが、一部私に改めた箇所がある。

（1）一部、『日本紀略』に拠り補う。

（2）梶川信行「コトバから文字へ――印南野従駕歌の論」『万葉史の論　山部赤人』一九九七　翰林書房

（3）村山出「笠金村の印南野従駕歌」『国語国文研究』第一三〇号　二〇〇六

（4）梶川前掲論文

（5）東光治「しび考」『万葉動物考』一九三五　人文書院

（6）関根真隆『奈良朝食生活の研究』一九六九　吉川弘文館
（7）新谷秀夫「鮪《突く》家持――越中萬葉歌の表現・小考――」『高岡市万葉歴史館紀要』第一二号　二〇〇二
（8）神野志幸恵「赤人の印南野行幸歌」神野志隆光他編『セミナー万葉の歌人と作品　第七巻』二〇〇一　和泉書院
（9）岩崎良子「さ寝考」『上代文学』第五〇号　一九八三
（10）木下良『事典　日本古代の道と駅』二〇〇九　吉川弘文館
（11）渡辺護氏（「明日よりは」とうたう意味」『万葉』第一四〇号　一九九一）によれば、「明日よりは」という句を持つ歌は、歌群の最後に位置して締めくくりの意味を持つ場合が多いという。
（12）清原和義「山部赤人――明石潟・潮干の道」『万葉集の風土的研究』一九九六　塙書房
（13）梶川前掲論文
（14）梶川信行「笠金村と山部赤人」『万葉史の論　笠金村』一九八七　桜楓社
（15）笠井昇「山部赤人の表現――印南野行幸時の歌をめぐって――」『解釈』第四一巻第一一号　一九九五
（16）神野志前掲論文。猶、稿者も旧稿にて、笠井氏や神野志氏と同じく、その可能性を想定していた。拙稿「山部赤人の神亀二年難波行幸従駕歌」『東京大学国文学論集』第八号　二〇一三
（17）坂本信幸「播磨国印南野行幸時の山部赤人作歌について」『叙説』第一八号　一九九一
（18）神野志隆光「私情をふくむ「歴史」世界」『万葉集をどう読むか――歌の発見と漢字世界』二〇一三　東京大学出版会
（19）池田三枝子「聖武朝の政治理念と「みやび」」『古代文学』三十四号　一九九五